

第3回本会レジュメ

担当：明治大学情報コミュニケーション学部3年 吉田周平
使用テキスト『愛すること』（エーリッヒ・フロム、紀伊国屋書店）

- 1. はじめに
- 2. エーリッヒ・フロムについて
- 3. 『愛すること』読解
- 4. 参考文献

- 1. はじめに

「愛」とは、孤独な人間が孤独を癒そうとする営みであり、愛こそが現実の社会生活の中で、より幸福に生きるための最高の技術である、とフロムはいう。
「愛」という概念自体、曖昧で論じるのはかなり難しいことですが、人間は何かを「愛」するものなので、この機会に少し考えてみてはどうだろう。
「愛すること」、これは人間の永遠のテーマではないでしょうか。

- 2,エーリッヒ・フロムについて

ユダヤ系ドイツ人の社会心理学、精神分析、哲学の研究者。マルクス主義とフロイトの精神分析を社会的性格論で結び付けた。新フロイト派、フロイト左派とされる。

- 3.『愛すること』読解

- 3-1.目次

序文

1章 愛は技術か

2章 愛の理論

3章 愛と現代西洋社会におけるその崩壊

4章 愛の習練

- 3-2.

資本主義は、個人に独立の新しい感情を与えたが、それと同時に、個人に孤独と孤立の感情をもたらし、疑いと不安でいっぱいにし、新しい服従と強制的な非合理的な活動へ個人を駆り立てた。

孤立しているという意識から不安が生まれる。そして、孤立は恥と罪悪感を生む。

人間のもっとも強い欲求とは、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である。この目的の達成に全面的に失敗したら、発狂するほかない。なぜなら、完全な孤独という恐怖感を克服するためには、孤立感が消えてしまうくらい徹底的に外界からひきこもるしかない。そうすれば、外界も消えてしまうからだ。

どの時代のどの社会においても、人間は同じ一つの問題の解決に迫られている。いかに孤立を克服するか、いかに合一を達成するか、いかに個人的な生活を超越して他者との一体感を得るか、という問題である。

現代人は、愛に渴えつつも現実にはそのエネルギーの大半を、成功、威信、金、権力というような目標をいかにして手に入れるかに費やしてしまう。

生産的活動で得られる一体感は、人間どうしの一体感ではない。祝祭的な融合から得られる一体感は一時的である。集団への同調によって得られる一体感は偽りの一体感にすぎない。完全な答えは、人間どうしの一体化、他者との融合、すなわち愛にある、とフロムは述べる。

そう考えると、現代人は、愛や生産的な仕事の自発性のなかで外界と結ばれるか、自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定感を求めることでしか孤独を克服できないということになってしまう。

- 4.参考文献

『愛すること』（エーリッヒ・フロム、紀伊国屋書店）

『自由からの逃走』（エーリッヒ・フロム、東京創元社）

文献案内

『一次元的人間』（ヘルベルト・マルクーゼ、河出書房新社）